

特集

初代主将から現主将まで

竹	本	靖	秀	竹	中	俊	晴
高	岡	忠	臣	古	谷	精	宏
近	藤	嘉	彦	平	元		猛
重	兼		亘	渡	辺	彰	二
宮	沢	典	男	宮	本	義	海

愛部心と伝統

高岡忠臣

現役諸君有難度う。本当に良くやってくれる。常に愛部心を持ち、伝統を軽んぜず、絶えず新しい部の方向を求め、時には迷い、苦勞も多かっただろう。しかし一つのその目的達成の累積が、10年の年月に正しく評価され、今日堂々たる部に成長した。更に過去種々活動を通じて、危険に立ち向う時、常に周到綿密なる計画、技術、協調、愛校心、愛部心、伝統心とが相俟って一つたりと人さな事故がなかった事は本当に喜ばしい事であり、立派な事であると思い、感謝している。十週年を迎えるに当り、更に今後の躍進を望まれる時まず今日の姿を正しく評価し、反省の機会を改めて考えてみた。現役諸君、我々は諸君の實力、向上心を本当に信ずることが出来、安心出来る。今後ともでかいこと、意義深い事を大にやって戴いて結構だ。本格的な海外学術調査も近い事である。

しかしながら、この事も忘れないで戴きたい。それは立派な後継者の育成だ。後輩の教育即ち其の力を引き出す仕事を合わせて務めて戴きたいと思う。我々今日あるは、それぞれの代が少なから

ず努力を重ね、年々成長してきたからであるが、その事よりも、良い後輩を見つけて育てて来た事である。それが今年も大切だ。しかし来年は自分達の育てた後輩が、更に素晴らしい。それが伝統だと思ふ。

広い観点から見れば、伝統を重んじて、進歩のない所に栄光なし。もう一度この言葉を共にかみ砕き、味わって戴きたい。将来の目標を、部の進むべき道を、打ちたてて、着実に達成して戴きたい。古いO. Bの一員として、常に諸君と交りを持って、共に考え、語り合う機会を持ちたいと願って居る。しかし仕事を持っている。本当に忙しく、仲々自由がきかないものだ。大半以上のO. Bがそうだと思う。しかし中には仕事を削いでまでも、それぞれの立場で探検を考え、靴を持っている先輩もある。いずれにしても愛部心は、諸君に優るとも劣らぬものを持っている。

現在十周年記念行事の準備を、現役の役員と共に世話してもらっているが、この時は本当に楽しくて仕方がない。お陰で水口君、和田君に無理を願って、玉造りの彼等の下宿先を、O. B部

室として、持つことが出来た。今後毎月27日の夜、定期的にO、Bが顔をそろえ、海外の事、たゆまぬ目的達成に共々努力を払っていきたいと思っておる。そうして20周年を迎える頃には海外と交流を持ち、またまた全国の高校生が、関大に

探検部ありと、その門に列を作る事だろう。もう一度言う。本当に楽しくて仕方がない。これが私の現在の心境だ。

諸君大いに進もう。

たかおか・ただおみ(QB)

マスコミと探検

最近、『マス・コミに乗る』という言葉がめったやたらに使われるようになった。朝のなんとかモーニングショーで物価値上げを一席ぶつ主婦連のおばさんから『最近マス・コミに追いかけてまわされてね。困ってるんだ……』とまんざらでもなさそうな学者先生までさまざまだが、とにかくテレビ、週刊紙のはんらんから、一億総タレント化、の風潮さえみられるようだ。

『探検』も御同様で、各大学グループが競って目先の変った催し？をひっさげてマス・コミに登場してきている。なにが新聞、テレビの記事としての扱いでその行為を正当づけ、価格づけようとしている感じすらするのである。一例を紹介しよう。

××大学は秘境〇〇地域に学生だけの探検隊を派遣することになった。一行は9月上旬日本を出発、現地に2週間滞在、その間〇〇地方の最高峰M山に登るかたわら現住民の生活文化、言語、信仰などを調査する。

なお一行のうち4人はN川をゴムボートで下り沿岸各部落の調査にあたる……(略)。

これはある大学の探検隊派遣を扱った新聞記事だ。なるほど記事としては立派に通用するし、一

般読者をうなずかせるが、ちょっと事情を知っている者ならとんだお笑いの内容である。M山はアプローチが長く登頂に4日はかかり往復の日程に入れると山登りだけでも2週間では苦しいのが実情。調査などとてもする余裕はない。山岳部とフンダーホーゲル部で構成されているこのグループの名称が『××大学文化学術探検隊』なのだから恐れ入る——という次第だ。

他のグループでもこれに似たものが多く、『これならマス・コミが飛びつきそうだ』といううたい文句の考案にうつつをぬかしている感じすらするのである。

ついこの間もマス・コミをにぎあわしたある冒険ストーリーに神戸のある青年が大西洋、太平洋をヨットで横断した、というのがあった。これなどもある新聞社の後援つきで『手記にいくら』『航海中の記録写真にいくら』と現ナマが渡されていたという。これには真ばなしがうわさされており、無事大太平洋の荒波を乗りきって房総沖についたとき、後援新聞社から『待った』がかかった。そのまま日本に上陸するとその新聞社が出している週刊紙の締め切りの関係から記事を独占できないというわけだ。そのため突如そのヨットは行方